【姿の期　１１月】

京都市立下京中学校
校長　安 居　昌 行

「足元を固め、将来に向かって歩もう」

「私自身、微生物がやってくれた仕事を整理したくらい。」ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村さんの第一声。翌日、ノーベル物理学賞を受賞され、二人の大学の恩師や同僚・家族への感謝の言葉を述べられた梶田さん。お二人の言葉からは、研究にひたむきに取り組んでこられた姿と謙虚な心を感じました。そして、自分の故郷や周囲の人への感謝の気持ちがひしひしと伝わってきました。

さて、暑い最中の８月２４日に始まった「姿の期間」も２か月が過ぎ、街もすっかり秋となりました。この間、合唱コンクール・文化の部・体育の部といった学校祭では、学級や学年、学校全体の「集団」としての素晴らしいまとまり、生徒の皆さんの「きらめく姿」が見られました。発表や演技、競技の練習、作品作りに、ひたむきに取り組む姿、仲間に声を掛け、互いに切磋琢磨し合っている姿、活動が終わった後には勝敗や成否は抜きにしてすがすがしい皆さんの笑顔や仲間と喜びを分かち合う姿が見られました。

ところで１１月は、３年生は自ら進路を切り拓き絞り込んでいく時期、２年生は５日間の生き方探究チャレンジ体験で、１年生は渉成園でのお茶会などを通して、自分を見つめ今まで以上に社会への一歩を踏み出す時期であり、多くの地域の人々や伝統文化などに触れ合うことができる時期でもあります。いずれの取組も、家族の方や地域の方々の支援があってできることです。そして、学習や生活の足元をしっかり固めていく大切な時でもあります。と同時に自分を取り巻く社会や人々の営み、将来に向かって歩もうとする道を探していくことも大切です。

結びに私の好きな考古学者の著書より引用します。「最近の好きな言葉を書きます。“学は人の砥礪（シレイ）なり。”砥は細かなトイシ。礪はあらいトイシ。細かい研究にくわえ、大きく物事を見る姿勢の両方が必要という意味でしょう。」（『京都の歴史を足元からさぐる』森浩一著）

〈足元を見つめるサギ　東本願寺の前で〉